

よろずは

平成二十六年
五月号

万葉文化館 おすすめ万葉歌

香具山かぐやまと 耳梨山みみなしやまと あひ

し時 立ちて見に来しこ 印い

南国原なみくに はら

万葉集 卷一—一四 中大兄皇子なかのおおえのおうじ（天智天皇てんじてんのう）

【意訳】

香久山と耳成山とが争った時に、阿菩あぼの大神が立ち
上がつて見に来た印南の国原よ。

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

この歌は、中大兄皇子（後の天智天皇）が詠んだ「三山みつやまの歌」の第一反歌です。

長歌は、「大和三山」とも称される、香具山と耳梨山とが畝傍山をめぐって争ったという神話を表現し、昔もそうだから今も愛する人を争うらしい、という内容です。

それに続けたこの反歌は、香具山と耳梨山とが争った時に、立ち上がって見に来た印南国原よ、と詠まれています。これだけを読むと、立ち上がって見に来たのは誰か、なぜ大和三山の歌に印南（現在の兵庫県加古川市・明石市）が登場するのか、さっぱりわかりません。

その答えは『播磨国風土記』にあるようです。出雲国の阿菩大神がとめようと向かったが、争いが収まったことを聞き、播磨国内に鎮座したという伝説が書き残されています。

『播磨国風土記』は、今から約一三〇〇年前年に成立したと考えられています。

【万葉古代学係】